

< 学術論文 >

自閉スペクトラム症および注意欠如・多動症傾向の中学生が 抱える日常生活上の困り感を尋ねるための自記式質問紙の 試作版開発

久保木智洸 信州大学総合医理工学研究科
高橋知音 信州大学学術研究院教育学系
本田秀夫 信州大学学術研究院医学系
鷲塚伸介 信州大学学術研究院医学系

キーワード：発達障害，中学生，困り感，質問紙，自閉スペクトラム症，
注意欠如・多動症

1. はじめに

自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder：以下，ASD）や注意欠如・多動症（attention deficit/hyperactivity disorder：以下，ADHD）などの発達障害を持つ子どもは数多く存在している。日本において2013年～2015年に行われた多地域疫学調査¹⁾では、2006年4月2日～2007年4月1日生まれの子どもの出生から小学1年生までの発達障害全体の累積発生率は4.1～7.3%であり、小学校3年生まで追跡すると累積発生率は4.2～8.7%であったと報告されている。ASDと診断される子どもの数は増加傾向にある²⁾と言われており、支援を必要としている子どもが増えていることから、早期に適切な支援を行うことが求められている。

また、発達障害とは診断されていないものの、行動や性格の特性に対して特別な配慮が必要だと考えられる子どもの存在も明らかになっている。文部科学省が全国の公立小・中学校の通常学級に在籍する児童生徒を対象として2012年に行った調査³⁾によると、知的発達に遅れはないものの、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は6.5%であった。ASDやADHDなどの発達障害について、日本語版自閉症スペクトラム指数（Autism-Spectrum Quotient：以下，AQ）⁴⁾やADHD評価スケール（ADHD Rating Scale：以下，ADHD-RS）⁵⁾といった医学的な側面からのアセスメントや診断の補助とするためのスクリーニング尺度は多数開発されているものの、一般的にそれらを利用するためには医療受診や支援機関への相談行動が必要である。したがって、法定健診では発達障害と疑われなかった子どもや、医療にも支援機関にも繋がることのできない家庭環境にいる子どもは、支援が必要な状態であっても支援が届き難い状況であると言える。

発達障害児者への適切な支援を検討する上では個々の支援ニーズを的確に把握することが求められる。日常生活への適応行動を客観的に評価するツールとして Vineland-II 適応行動尺度⁶⁾が開発されているが、回答者は保護者や関係者となっており、本人の主観的な日常生活上の困り感^{注1)}を測ることはできない。適切な支援を行うためには、客観的な評価と合わせて本人自身が何に困っているのかという視点が重要であると考えられる。

対象者本人の主観的な支援ニーズを把握するためのツールとしては、大学生対象の発達障害に関連した困り感を尋ねるための自記式質問紙が開発されている^{7),8)}。しかし、現在開発されているものは、大学生向けの質問項目となっており、子どもがそのまま利用できるものとはなっていない。

これらのことから今回、診断やスクリーニングを目的とするものではなく、ASD・ADHD 傾向にある子どもが日常生活上で抱える自覚的な困り感を尋ねるための自記式質問紙の試作版を開発することとした。中学生程度の年齢であれば自身の抱えている困り感について自記式で回答する事は可能であると考えられるため、中学生を対象とした。

2. 中学生のための ASD・ADHD 困り感の抽出

2. 1 目的

中学生のための ASD・ADHD 困り感を尋ねるための質問項目を作成することを目的とした。

2. 2 方法

ASD 困り感と ADHD 困り感のそれぞれについて、既存の質問紙やスクリーニング尺度からは ASD・ADHD の症状を、発達障害当事者や精神科医の書籍から、10代前半の発達障害傾向の子どもが日常生活上で抱えやすい症状や困り感を収集した。

ASD 困り感の抽出に使用した尺度は、AQ 児童用⁹⁾、親面接式自閉スペクトラム症評定尺度¹⁰⁾、児童生徒理解に関するチェック・リスト¹¹⁾、困りごとチェックシート¹²⁾の4つであり、書籍は7冊^{13),14),15),16),17),18),19)}であった。ADHD 困り感の抽出に使用した尺度は Conners3 日本語版の本人用・保護者用・教師用²⁰⁾、CAARS 日本語版²¹⁾、ADHD-RS⁵⁾、児童生徒理解に関するチェック・リスト¹¹⁾の4つであり、書籍は6冊^{22),23),24),25),26),27)}であった。

これらを、ASD 困り感と ADHD 困り感ごとに KJ 法²⁸⁾に準じた方法によって分類した。分類は、医学を専攻する大学院生1名と医学、看護学、理学療法学を専攻する学部生4名で行った。

2. 3 結果

既存の質問紙やスクリーニング尺度、書籍から ASD と ADHD の症状や困り感を収集した結果、ASD では316項目、ADHD では563項目が抽出された。これらを分類した結果、ASD 困り感には6つの大グループ（「会話が苦手」「感情推測が苦手」「衝動的である」「得意・不得意の差が激しい」「集中力にムラがある」「スケジュール管理が苦手」と8

つの中グループ（「人付き合いが苦手」「感情のコントロールが難しい」「こだわりが強い」「細かなところに視点がいつってしまう」「不器用な面がある」「独特な動き、表情がある」「臨機応変な対応が苦手」「感覚の不安定さ」）、1つの小グループ（「整理整頓が苦手」）に分類された。また ADHD 困り感には4つの大グループ（「衝動的である」「集中力にムラがある」「感情のコントロールが苦手」「不注意である」）と6つの中グループ（「自律神経のコントロールが苦手」「勉強が苦手な教科がある」「読み書きが苦手」「親との関係がうまくいかない」「整理整頓ができない」「時間にルーズ」）、7つの小グループ（「朝の準備が大変」「身だしなみを整えられない」「学校をサボる」「自分はどこか変で人と違うと感じる」「自分に自信がない」「空想にふける」「おおらかで性格的に明るい」）に分類された。それぞれのグループより中学生の困り感として適切と思われる項目を、ASD 困り感には47項目、ADHD 困り感には55項目選択した。

3. 中学生のための ASD・ADHD 困り感項目のわかりやすさについての検討

3. 1 目的

作成した質問項目が中学生にとってわかりやすい文言となっているのかを検討し、不適切な項目について削除や変更修正を行うことを目的とした。

3. 2 方法

(1) 対象者

山梨県にある公立中学校1校の1年生から3年生までの計88名を対象とした。

(2) 材料

質問項目で尋ねられている文言が中学生にとってわかりやすいか、質問の意図が十分に伝わっているかを調べるために、質問内容のイメージのしやすさについて評定させた。

質問紙の表紙にて「質問項目の内容についてイメージしやすいか、そうでないかをお答えください。質問文を読んで、何を聞かれているかがわかりにくい、どう答えたら良いかわかりにくいと思ったら『イメージしにくい（1や2）』と回答してください。」と説明を行った。

また教示には「各質問項目について、質問の内容のイメージのしやすさについて当てはまるところに丸をつけてください」とし、回答例を併記した。評定は「1 とてもイメージしにくい」「2 少しイメージしにくい」「3 まずまずイメージしやすい」「4 とてもイメージしやすい」の4件法とした。

(3) 手続き

質問紙は2020年9月下旬に担任を通して生徒に配布した。質問紙には研究趣旨と本人・保護者への説明の書面を同封し、調査への協力は任意であり質問紙への回答をもって研究の同意とする旨を通知した。同意が得られた生徒について、学校の教室（集団）にて無記名で質問紙に回答を求めた。回収後の質問紙は担任を通して回収した。

(4) 倫理的配慮

本研究は信州大学医学部医倫理委員会にて承認された。(承認番号 4842)

3. 3 結果

(1) 分析対象

回収された 81 名（男子 41 名，女子 38 名，不明 2 名）のうち，ASD 困り感項目や ADHD 困り感項目に欠損値のある者，質問内容を「イメージのしやすさ」ではなく「自分に当てはまるもの」と明らかに誤解している者を除外し，ASD 困り感項目は 52 名（男子 26 名，女子 26 名，平均年齢 $M=13.9$ ， $SD=0.97$ ，有効回答率 59%），ADHD 困り感項目は 53 名（男子 25 名，女子 28 名，平均年齢 $M=13.8$ ， $SD=0.97$ ，有効回答率 60%）を分析対象とした。

(2) 質問項目の検討

ASD 困り感項目，ADHD 困り感項目いずれも，イメージしにくい（評定 1 と 2）の度数の累積パーセントが 40% である項目，また，「とてもイメージしにくい（評定 1）」が 20% を超える項目を不適切な項目として検討を行った。削除，統合，文言修正などの対応を経，最終的に ASD 困り感が 46 項目，ADHD 困り感が 51 項目となった。

4. 中学生のための ASD・ADHD 困り感項目の項目分析と因子分析，妥当性の検討

4. 1 目的

作成した質問項目に対する中学生の反応パターンから不適切な項目を削除した上で因子分析を行い，得られた下位尺度と AQ・ADHD-RS の保護者回答との相関分析により，妥当性の検討をすることを目的とした。

4. 2 方法

(1) 対象者

長野県にある公立中学校 1 校の 1 年生から 3 年生までの生徒 463 名とその保護者を対象とした。

(2) 材料

中学生本人には，今回作成した「中学生のための ASD・ADHD 困り感質問紙」を，その保護者の半数には「AQ 児童用」^{9), 注 2)}を，もう半数には「ADHD-RS」^{5), 注 3)}を配布した。

「中学生のための ASD・ADHD 困り感質問紙」の選択肢は「とても困っている（6 点）」「困っている（5 点）」「少し困っている（4 点）」「あまり困っていない（3 点）」「困っていない（2 点）」「全く困っていない（1 点）」とした。

(3) 手続き

質問紙は 2020 年 12 月上旬に担任を通して生徒に配布した。質問紙には研究趣旨と生徒・保護者説明の書面を同封し，調査への協力は任意であり質問紙への回答をもって研究の同意とする旨を通知した。生徒・保護者とも 1 週間の自宅回答期間中に回答することを求めた。回答された質問紙は担任を通して回収した。

(4) 統計処理

各項目の分布に正規性が仮定できないため、データを順序尺度とみなし分析した。各項目得点の学年差は Kruskal-Wallis の検定を行い、有意差があった項目の多重比較については Dann-Bonferroni の方法を用いた。項目の弁別力は G-P 分析 (Good-poor analysis) によって検討し、差の検定は Mann-Whitney の U 検定を行った。項目間の相関係数の算出は Polychoric 相関を用い、因子分析はカテゴリカル因子分析を行った。妥当性検討のための相関係数は Spearman の順位相関係数を使用した。統計ソフトは、HAD16.3²⁹⁾および IBM SPSS Statistics 25 を使用した。

(5) 倫理的配慮

本研究は信州大学医学部医倫理委員会にて承認された。(承認番号 4842)

4. 3 結果

(1) 対象者

99 名 (男子 34 名, 女子 65 名) の中学生と同数のその保護者 (AQ 回答者 56 名, ADHD-RS 回答者 43 名) から回答が得られた。ASD 困り感項目の完全回答は 92 名 (男子 33 名, 女子 59 名, 平均年齢 $M=13.6$ 歳, $SD=0.83$, 有効回答率 92.9%) ADHD 困り感項目の完全回答は 83 名 (男性 30 名, 女性 53 名, 平均年齢 $M=13.6$ 歳, $SD=0.81$, 有効回答率 83.8%) であった。AQ (保護者) の完全回答は 51 名 (父 2 名, 母 48 名), ADHD-RS (保護者) の完全回答は 42 名 (父 6 名, 母 36 名) であった。

(2) 項目分析

各項目の記述統計を見ると平均値は全体的に低くなっており、正の方向に歪みがみられ、多くの項目で「困っていない」方に分布が偏っていた。

各項目平均値の学年差を検討した結果、ASD 困り感項目では 3 つの項目で有意な違いがあった。項目「人とトラブルが多くて困る」は ($H=6.27$, $p=.044$) 2 年生より 1 年生で高かった ($adj\ p=.040$)。項目「人の気持ちや考えがわからないことがあって困る」は ($H=7.61$, $p=.022$) 2 年生より 3 年生で高かった ($adj\ p=.031$)。項目「やめられない癖があって困る」は ($H=7.32$, $p=.026$) 2 年生より 1 年生で高かった ($adj\ p=.043$)。また ADHD 困り感項目では 2 つの項目で有意な違いがあった。項目「いつも動いていたくて、落ち着くことができなくて困る」は ($H=8.40$, $p=.015$) 2 年生より 1 年生で高かった ($adj\ p=.043$)。項目「集中することができなくて困る」は ($H=8.29$, $p=.016$) 2 年生より 3 年生で高かった ($adj\ p=.015$)。

続いて各項目の弁別力を検討した。質問項目について、全項目平均得点の高かった上位群 25%と平均得点の低かった下位群 25%の差が有意であれば、その項目は弁別力が高いと言える。今回、全項目平均得点の上位 25% (ASD : 2.57 点以上, ADHD : 3.16 点以上) を高群, 下位 25% (ASD : 1.26 点以下, ADHD : 1.22 点以下) を低群とし、高群と低群の各項目の平均値の差について検定を行なった。その結果、全ての項目で高群が低群よりも有意に得点が高かった。

これらのことから、全体的に「困っていない」という方向に回答が偏っているものの、弁別力について問題はみられないため「困り感」を尋ねる質問紙作成という観点からは全ての質問項目は概ね適切であると考えられた。

(3) 項目の削除

対象である中学生の回答への負担が大きくなるように項目を減らす必要があると考え、以下の3点を踏まえて質問項目の削除を行なった。項目削除の際に考慮した点は①強い相関(.80以上)のある項目を選ぶこと、②AQやADHD-RSの下位尺度との相関が低い項目を選ぶこと、③質問項目抽出時の分類で同じ大グループに入っている項目同士を比較し最低一つは残すこと、という3点である。これらの3点で検討した上で削除すべきか判断が難しい項目については、中学生にとって聞かれている内容がイメージしやすい項目かどうかを改めて判断材料とした。

その結果、ASD困り感、ADHD困り感の項目数はともに33項目となった。

(4) ASD困り感項目の因子分析と下位尺度の構成

ASD困り感項目33項目に対して探索的因子分析(カテゴリカル因子分析, 重みつき最小二乗法, プロマックス回転 power=3)を行った。まず, 固有値の減衰状態(14.64, 2.15, 1.73, 1.50, 1.46, 1.24, 1.08, ...) および解釈可能性から2因子構造が得られた。結果を表1に示す。なお, 因子負荷量が2因子両方で高い項目についても一部残しているが, これはASD傾向のある中学生が日常生活で抱えそうな困り感についてある程度網羅的にとらえるためである。

第1因子は「先のスケジュールがわかっていないと不安で困る」「初めての場所では, とまどうことが多くて困る」「自由にやっていると, どう行動したら良いか決められなくて困る」などの先の見通しに関連する項目や, 「細かいことが気になりすぎてしまうことがあって困る」「気が散りやすくて困る」「物事に集中しすぎてしまうことがあって困る」などの集中力に関連する項目などが高い負荷量を示したことから「先の見通し, 集中力に関する困り感」と名付けた。

第2因子は『「ほかの人のことをもっと考えて行動しなさい」などと, 注意されることがあって困る」「相手の言葉の意味がわからないことがあって困る」などの想像力に関連する項目や, 「自分の発言で周りの人と, トラブルになってしまうことがあって困る」「人の話を聞くことが苦手で困る」などのコミュニケーションに関連する項目などが高い負荷量を示したことから「想像力, コミュニケーションに関する困り感」と名付けた。

以上の因子分析の結果をもとに, 各因子に高い負荷量を示す項目から尺度を構成し, それらの項目の平均点を尺度得点とした。また, 各下位尺度について α 係数を算出したところ, いずれも.90以上の値が得られた。また, 2尺度間に中程度の相関($r=.665$)がみられた。各下位尺度の平均値, 標準偏差および α 係数を表2に, 下位尺度間の相関分析の結果を表3に示した。

発達障害傾向の中学生が抱える困り感を尋ねる質問紙開発

表 1 ASD 困り感項目 33 項目の因子負荷行列

項目	因子		
	1	2	共通性
先のスケジュールがわかっていないと不安で困る	.879	-.147	.623
初めての場所では、とまどうことが多くて困る	.859	-.085	.648
細かいことが気になりすぎてしまうことがあって困る	.811	.065	.732
自由にやっているとと言われると、どう行動したら良いか決められなくて困る	.789	.006	.628
気が散りやすくて困る	.770	.106	.711
新しいことにチャレンジすることが苦手な困る	.747	.120	.691
気分が波があつて困る	.710	.139	.655
急な予定変更が苦手な困る	.680	.166	.640
物事に集中しすぎてしまうことがあって困る	.657	.071	.498
何度もくり返してやりたい癖や行動があつて困る	.657	.148	.582
勝ち負けにこだわりすぎてしまうことがあって困る	.567	.225	.542
スケジュールを立てるのが苦手な困る	.547	.250	.544
自分を傷つけることをしてしまうことがあって困る	.512	.353	.627
体を動かすのが苦手な困る	.500	.177	.399
においや音、肌にもものが触れる感覚などに過敏すぎて困る	.455	.330	.515
人の気持ちや考えがわからないことがあって困る	.450	.404	.607
自分が疲れていることに気がつかないことがあって困る	.404	.353	.478
苦手で食べられないものが多くて困る	.375	.247	.325
髪型が変わったりメガネをかけたりするなどのちょっとした変化で、その人が誰だかわからなくなってしまうことがあって困る	-.166	.909	.653
「ほかの人のことをもっと考えて行動しなさい」などと、注意されることがあって困る	-.181	.884	.602
自分の発言で周りの人と、トラブルになってしまうことがあって困る	.021	.869	.780
相手の言葉の意味がわからないことがあって困る	.164	.762	.775
人の話を聞くことが苦手な困る	.186	.664	.639
いじめられることがあって困る	.140	.636	.544
においや音、肌にもものが触れる感覚などに鈍感で困る	.292	.609	.691
整理整頓が苦手な困る	.152	.586	.484
会話や雑談が苦手な困る	.265	.577	.608
人にだまされてしまうことがあって困る	.244	.576	.578
机や椅子、壁などにぶつかってしまうことが多くて困る	.348	.529	.645
友達がうまく作れなくて困る	.342	.513	.614
周りの人がふつうにできていることでも、自分にとってはとても苦手なことがあって困る	.385	.505	.662
異性とうまく関われなくて困る	.318	.445	.488
おしゃべりしながら勉強するなど、同時に2つ以上のことをこなすことが苦手な困る	.327	.377	.413
因子寄与	15.622	14.829	
因子間相関 $r=.665$			

表 2 各尺度得点の平均値、標準偏差、 α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数	N
先の見通し、集中力に関する困り感	2.26	0.96	.934	92
想像力、コミュニケーションに関する困り感	1.86	0.77	.916	92

(5) ASD 困り感項目の 各下位尺度の妥当性の検討

因子分析の結果から構成された下位尺度と AQ 得点の下位尺度との相関から妥当性の検

討をした（表3）。その結果、「先の見通し、集中力に関する困り感」尺度はAQの「社会的スキル」「注意の切り替え」「想像力」に弱～中程度の相関がみられた。「想像力、コミュニケーションに関する困り感」尺度はAQの「社会的スキル」「注意の切り替え」「コミュニケーション」「想像力」に弱い相関がみられた。

表3 ASD 困り感項目の各因子とAQの下位尺度の相関

	AQ下位尺度				
	社会的スキル	注意の切り替え	細部への関心	コミュニケーション	想像力
因子1: 先の見通し, 集中力に関する困り感	.429	.203	.047	.006	.299
因子2: 想像力, コミュニケーションに関する困り感	.400	.314	-.075	.207	.383

(6) ADHD 困り感項目の因子分析と下位尺度の構成

ADHD 困り感項目 33 項目に対して探索的因子分析（カテゴリカル因子分析，重みつき最小二乗法，プロマックス回転 power=3）を行った。まず，固有値の減衰状況（16.60, 2.01, 1.88, 1.41, 1.22, 1.08, ...）および解釈可能性から 2 因子を仮定し分析を繰り返したところ，単純構造が得られた。結果を表 4 に示す。なお，ADHD 困り感項目についても日常生活で抱えそうな困り感についてある程度網羅的にとらえるために，因子負荷量が 2 因子両方で高い項目についても残している。

第 1 因子は「人とトラブルを起こしてしまうことがあって困る」「新しい友達を作るのが苦手な困る」などの対人関係に関連する項目，また「夜眠れないことがあって困る」「生活習慣が乱れてしまうことがあって困る」などの生活習慣に関連する項目などが高い負荷量を示したことから「対人関係，生活習慣に関する困り感」と名付けた。

第 2 因子は「勉強が苦手な困る」「難しい課題をするのが苦手な困る」といった課題への取り組みに関連する項目や「集中することができなくて困る」「不注意でうっかりミスが困る」といった不注意に関連する項目などが高い負荷量を示したことから「実行機能，不注意に関する困り感」と名付けた。

以上の因子分析の結果をもとに，各因子に高い負荷量を示す項目から尺度を構成し，それらの項目の平均点を尺度得点とした。また，各下位尺度について α 係数を算出したところ，いずれも .90 以上の値が得られた。また 2 尺度間に中程度 ($r=.695$) の相関がみられた。の各下位尺度の平均値，標準偏差および α 係数を表 5 に，下位尺度間の相関分析の結果を表 6 に示した。

発達障害傾向の中学生が抱える困り感を尋ねる質問紙開発

表 4 ADHD 困り感質問項目 33 項目の因子負荷行列

項目	因子		
	1	2	共通性
人とトラブルを起こしてしまうことがあって困る	.943	-.052	.823
新しい友達を作るのが苦手で困る	.869	-.146	.601
身だしなみを人に注意されてしまうことがあって困る	.856	-.025	.703
ルールを守ることが苦手で困る	.830	.078	.784
自分の言動で人をイライラさせてしまうことがあって困る	.799	.090	.747
生活習慣が乱れてしまうことがあって困る	.723	.007	.531
人の話を聞くのが苦手で困る	.706	.164	.685
指示されたように行動できないことがあって困る	.695	.224	.750
朝出かけるまでの準備がたいへんで困る	.693	.190	.699
夜眠れないことがあって困る	.676	.046	.501
集会など、じっとしていなければならない場面がつかなくて困る	.633	.234	.662
気分が波があって困る	.605	.290	.694
お金を使いすぎてしまうことがあって困る	.584	.269	.632
いつも机の上や部屋などが散らかってしまい困る	.573	.213	.543
しゃべりすぎてしまうことがあって困る	.570	.218	.545
順番を待たされるとイライラして困る	.569	.245	.576
時間を守ることが苦手で困る	.556	.283	.607
自分が何をすればいいのか分からないときがあって困る	.543	.375	.718
自分はどこか変で人と違うと感ずることがあって困る	.542	.332	.654
字がへたで困る	.388	.304	.406
勉強が苦手で困る	-.050	.913	.772
難しい課題をするのが苦手で困る	-.032	.902	.773
本を読むのが苦手で困る	-.165	.832	.528
集中することができなくて困る	.131	.814	.828
読んだ内容を理解するのが苦手で困る	.068	.784	.693
忘れっぽくて困る	.225	.763	.871
物事を最後までやり遂げられなくて困る	.196	.737	.782
物事をうまくこなすことができなくて困る	.223	.729	.807
特定の科目だけ極端に苦手で困る	.102	.692	.589
不注意でうっかりミスがあって困る	.265	.669	.765
親に叱られることがあって困る	.196	.668	.667
飽きっぽくて困る	.296	.652	.780
活動や課題をするための、スケジュールを立てることが苦手で困る	.380	.507	.670
因子寄与	18.108	17.305	
因子間相関 $r=.695$			

表 5 各尺度得点の平均値, 標準偏差, α 係数

	平均値	標準偏差	α 係数	N
対人関係, 生活習慣に関する困り感	1.99	0.88	.943	83
実行機能, 不注意に関する困り感	2.45	1.23	.951	83

(7) ADHD 困り感項目の各下位尺度の妥当性の検討

因子分析の結果から得られた下位尺度と ADHD-RS の下位尺度との相関から妥当性を検

討した（表6）。その結果、「対人関係、生活習慣に関する困り感」尺度はADHD-RSの「不注意」と弱い相関がみられた。また、「不注意、実行機能に関する困り感」尺度ではADHD-RSの「多動性・衝動性」と「不注意」の両方に弱～中程度の相関がみられた。

表6 ADHD 困り感項目の各因子と ADHD-RS の下位尺度の相関

	ADHD-RS下位尺度	
	多動性・衝動性	不注意
因子1：対人関係、生活習慣に関する困り感	.161	.340
因子2：実行機能、不注意に関する困り感	.322	.461

5. 考察

本研究では既存の質問紙に加え、当事者や医師の書いた書籍からASD、ADHDのある中学生が抱えやすい困り感を抽出し、質問紙を作成した。そして文言のわかりやすさを考慮し、項目削除と文言の修正を行なった。また対象である中学生の回答への負担が大きくなるように項目を減らす必要があると考え、ASD、ADHDそれぞれ33項目を選んだ。

今回ASD、ADHD困り感項目共に2因子解を選択した。その理由は3因子以上の解を求めても、解釈可能な形で第3因子以降の因子に高い負荷量を示す項目が十分にみられなかったことによる。これは項目間の相関が全体的に高かったことによると考えられる。ASD・ADHD傾向の困り感を抱えていると考えられる中学生からの回答が比較的少なく、また困り感を抱えている者はほとんどの項目で「困っている」方へ回答をしたことから、項目間の相関が強い結果となったと考えられる。今回は特に相関が強い項目をいくつか削除したが、因子分析によって得られたASD、ADHD質問項目の各下位尺度は、因子間相関が強いものとなった。今後、診断を受けている中学生のデータを追加することで、因子構造も異なってくる可能性がある。現時点での因子結果に基づいて構成された下位尺度について既存の尺度と相関を検討したところ、多くの下位尺度で相関がみられたことから、妥当性の根拠は得られた。

選んだ項目を大学生対象の困り感質問紙^{7,8)}と比較すると、尋ねている内容は似ているものが多い。ASD困り感では、初めての環境に対する困り感や対人関係に関する困り感、感覚に関する困り感などを共通して尋ねている。またADHD困り感では、課題提出の締め切り等のルール、時間管理に関する困り感や、生活リズムに関する困り感、気分の波に関する困り感、不注意や衝動性に関する困り感などが共通している。これは、10代前半であっても大学生になった20歳前後になっても変わらない困り感であると考えられる。

中学生版の特徴としては、ADHD困り感項目の「親に叱られることがあって困る」のような、大人からの働きかけに関連する困り感が含まれることである。大学生であっても

親との関わりは重要なポイントであるが、大学生版にはこれに関連した困り感を尋ねる項目は含まれていない。大学生になると親元を離れて暮らす学生も多いが、中学生の場合はほとんどの生徒が親と暮らしており、また思春期は親との衝突も多い時期であることから、困り感を尋ねる質問項目として重要だと考えられる。

また「異性とうまく関われなくて困る」といった異性との関わりに関連した困り感が含まれることも、大学生版には含まれていなかった特徴として挙げられる。思春期に直面する異性関係に関する問題は、発達障害の有無に関わらず誰しもが抱える。ただ、ASDやADHDの傾向を持っていると、対人コミュニケーションの苦手さ等から、異性と適切な関係を作ることによって課題を抱えてしまうこともあると考えられる。そのため、この点について尋ねる質問項目が含まれたことにも中学生版の意義があると言えるだろう。

各項目の学年別の平均値の違いについて、最終的に残した項目の中で有意な差が見られたのは、ASD困り感では「人の気持ちや考えがわからないことがあって困る」、ADHD困り感では「集中することができなくて困る」の2項目であった。この2項目は2年生より3年生の平均値の方が高かった。

まず「人の気持ちや考えがわからないことがあって困る」はマインドリーディングの異常³⁰⁾に関連していると考えられる。内山ら³¹⁾はASDのある人の思春期は他者の心との出会いがあり、自己が異質であることを認識する時期であると述べている。そして定型発達の人であれば、自己と他者の考えが相違することはすでに幼児期に認識しているが、ASDのある人は思春期において認識するという。そのため中学2年から3年へと成長するにつれ、本人が周囲と自身との違いに気づき、自分がどう思われているのか、他者がどう考えているのか悩むことが増えたということが影響した可能性がある。また高学年になり、より人間関係が複雑化することの影響も考えられる。最高学年になると友人や教師などと付き合いが長くなったり、部活動や委員会などにおいて後輩との関わりが求められたりする。その中で、他者の気持ちや考えを推測することに困難を抱えている場合、それが自覚的な困り感として感じやすくなっているのかもしれない。

そして「集中することができなくて困る」は進学等に向けた勉強への困難感が関係していると考えられる。受験などのために、集中して授業を聞いたり、自主的な勉強をしたりすることが求められる時期である。そういった状況において、やらなければならないことに集中できないことが、本人の自覚的な困り感として感じられていたのではないだろうか。

本研究の限界について以下に述べる。まず、中学生全般に共通する問題とASDやADHDの生徒特有の問題が混在している可能性があることである。ASD・ADHD傾向による困り感を抱えている生徒を適切な支援に繋げるという観点からは、これらの問題をもう少し分離して捉えられることが望ましい。そのため今後、診断を受けている生徒といない生徒の回答を比較することで項目内容について整理していくことが課題である。次に、中学生の回答能力の問題が挙げられる。今回、項目間の相関が高かったことから、中学生

は自分が困っているか困っていないかは判断できるが、何に困っているのかをうまく自覚できていないという可能性が考えられた。

これらの限界は対象者数が少なかったことの影響が大きいと考えられる。対象者数が少なくなった理由としては回収率が低かったことが挙げられる。今回、自宅回答期間を設けて回答を得たが、一度自宅へ持って帰り、回答の後にまた学校へ持っていくという形が回収率に影響を与えた可能性がある。今後、同意を得られた生徒からは教室での回答を求めるなど、回答場所を工夫する必要性もあるだろう。また、質問項目数が多く、回答する中学生への負担が大きかったことも考えられる。この点については大学生版では短縮版の開発³²⁾もなされているため、中学生版についても回答者の負担を考慮し、短縮版の開発をすることが今後の課題である。

このようにいくつかの課題が挙げられるものの、今回の研究の結果、ASD・ADHD傾向の中学生が抱える日常生活上の困り感を尋ねるための質問項目が作成でき、また既存のスクリーニング尺度との関連もみられたことは本研究の意義と言える。

注

注¹ 本研究で使用している「困り感[®]」という言葉は、師岡秀治氏の登録商標(第5950740号)です。

注² AQ日本語版児童用は株式会社三京房の出版物です。本研究では配布数分購入し使用しています。

注³ ADHD-RSは株式会社明石書店の著作物であり、その複製使用を一般社団法人出版者著作権管理機構が管理しています。本研究では複製枚数分の複製利用許諾を購入し使用しています。

文 献

- 1) 本田秀夫(研究代表者)：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(身体・知的等障害分野))発達障害児とその家族に対する地域特性に応じた継続的な支援の実施と評価 平成25～平成27年度総合研究報告書，2016
- 2) 村上寛，本田秀夫：自閉スペクトラム症の診断例の増加とその要因，*臨床精神医学*，49(2)，271-275，2020
- 3) 大南英明(研究代表者)：通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について，文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課，2012
- 4) 若林明雄，東條吉邦，Simon Baron-Cohen，Sally Wheelwright：自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版の標準化，*心理学研究*，第75巻，第1号，78-84，2004
- 5) 市川宏伸・田中康雄監修，坂本律訳：診断・対応のためのADHD評価スケール

- ADHD-RS (DSM 準拠) チェックリスト 標準値とその臨床的解釈, 明石書店, 2008
- 6) Sparrow SS, Cicchetti DV, Balla DA : Vineland adaptive behavior scales, second edition: Survey forms manual, *Minneapolis*, Pearson, 2005, (辻井正次, 村上隆日本版監修, 黒田美保, 伊藤大幸萩原拓, 染木史緒 : 日本版 Vineland-II 適応行動尺度マニュアル, 日本文化科学社, 2014)
- 7) 岩渕未紗, 高橋知音 : 大学生の ADHD 困り感質問紙の作成, *信州心理臨床紀要*, 第 10 号, 13-24, 2011
- 8) 山本奈都実, 高橋知音 : 自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発, *信州心理臨床紀要*, 第 8 号, 35-45, 2009
- 9) 若林明雄, 内山登起夫, 東條吉邦, 吉田友子, Simon Baron-Cohen, Sally Wheelwright : 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 児童用・日本語版の標準化—高機能自閉症・アスペルガー障害児と定型発達児による検討—, *心理学研究*, 第 77 巻, 第 6 号, 534-540, 2007
- 10) 神尾陽子, 行廣隆次, 安達潤, 市川宏伸, 井上雅彦, 内山登紀夫, 栗田広, 杉山登志郎, 辻井正次 : 思春期から成人期における広汎性発達障害の行動チェックリスト : 日本自閉症協会版広汎性発達障害評定尺度(PARS) の信頼性・妥当性についての検討, *精神医学*, 48 巻, 5 号, 495-505, 2006
- 11) 大南英明 (研究代表者) : 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査, 文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課, 2002
- 12) 原田謙, 萩原徹也, 山田慎二, 篠山大明, 鷲塚伸介 : 自閉症スペクトラム障害における自己理解と対処スキルに関する研究, *明治安田こころの健康財団 研究助成論文集*, 47, 100-109, 2011
- 13) 星野あゆみ, 本田秀夫監修 : 発達障害のわたしのこころの声, 学研マーケティング, 2015
- 14) 綾屋紗月, 熊谷晋一郎 : 発達障害当事者研究 ゆっくりていねいにつながりたい, 医学書院, 2008
- 15) 佐々木正美 : 思春期のアスペルガー症候群, 講談社, 2008
- 16) 月森久江 : 発達障害がある子どもを育てる本 中学生編, 講談社, 2009
- 17) 佐々木正美 : アスペルガー症候群(高機能自閉症)の子どもを育てる本 学校編, 講談社, 2008
- 18) 小道モコ : あたし研究 自閉症スペクトラム～小道モコの場合, クリエイツかもがわ, 2009
- 19) 小道モコ : あたし研究 2 自閉症スペクトラム～小道モコの場合, クリエイツかもがわ, 2013
- 20) Conners CK (田中康雄監訳) : Conners3 日本語版, 金子書房, 2017
- 21) Conners CK, Drew Erhardt, Elizabeth Sparrow (中村和彦監修, 染木史緒・大西将史監

- 訳) : CAARS 日本語版, 金子書房, 2011
- 22) 内山登紀夫, 高山恵子 : ふしぎだね! ? 新版 ADHD (注意欠如多動性障害) のおともだち, ミネルヴァ書房, 2019
- 23) 月森久江 : 発達障害がある子どもを育てる本 中学生編, 講談社, 2009
- 24) 内山登紀夫監修, 中山清司編 : こんな時, どうする? 発達障害のある子への支援 中学校以降, ミネルヴァ書房, 2009
- 25) 国立病院機構肥前精神医療センター編, 大隈紘子・伊藤啓介監修, : 肥前方式親訓練プログラム AD/HD をもつ子どものお母さんの学習室, 二瓶社, 2005
- 26) キャスリーン・ナドー&エレン・ディクソン著, 水野薫, 内山登紀夫, 吉田友子監訳 : きみもきつとうまくいく 子どものための ADHD ワークブック, 東京書籍, 2001
- 27) 本田秀夫, 日戸由刈監修 : ADHD の子の育て方のコツがわかる本, 講談社, 2017
- 28) 川喜田二郎 : 発想法—創造性開発のために, 中央公論社, 1967
- 29) 清水裕士 : フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案, *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73, 2016
- 30) Simon Baron-Cohen, Alan M. Leslie, Uta Frith : Does the autistic child have a “theory of mind” ?, *Cognition*, 21, 37-46, 1985
- 31) 内山登紀夫, 江場加奈子 : アスペルガー症候群 : 思春期における症状の変容, *精神科治療学*, 19 (9), 1085-1092, 2004
- 32) 山崎勇, 高橋知音, 岩渕未紗, 小田佳代子, 徳吉清香, 金子稔 : UPI-RS, ADHD・ASD 困り感質問紙の短縮統合版の試作, *CAMPUS HEALTH*, 49 (3), 67-72, 2012

(2021年 9月30日 受付)
(2022年 3月16日 受理)